

「あすなる物語」

中学三年 安河内 瞳

あすは檜になろう、あすは檜になろう。」あすなるは、そう思いながらも、ついには檜になることができない木である……。

このあすなるの説話は、私たち人間にも言えることではないか。人は常に発展と向上を望み、もがき続けるあすなるだと思ふ。そして、本作の主人公、鮎太もその一人だ。

両親がいるのにもかかわらず、両親と離れて天城山麓の小さな村で祖母と二人で生活している鮎太。彼は祖母を慕っていたが、一方で心の奥深くでは母親を恋い求めている。その鮎太の報われることのない感情は、やがて年上の女性へ思いを寄せる、という形になっていく。自分自身ははっきりとそう意識していなくても、鮎太の心の中には常に両親がいけないことによる寂しさがあり、その枯渇した心が年上の女性を求める行動に繋がってしまったのだ。

鮎太の中にあつた小さな芽、孤独感と疎外感は次第に大きく育ち、それらは鮎太の虚無感となっていく。そして、友人たちの誰しもが「自分は檜だ」と信じて成長しようとする中で、鮎太は一人、自分は檜ではない。あすなるでしかないのだ。」という、諦めに近い感情を抱いてしまう。

しかし、そんな鮎太の態度を、檜になろうと努力しない者は、あすなるにすらない」と非難した未亡人。私には、鮎太が思いを寄せるその彼女の言葉が、劣等感で押し潰されてしまいそうな鮎太を後押しするかのような、優しさを帯びているものを感じられた。鮎太が幼き日から追い求めていた、「母」の姿とは、彼女のような姿であつて、だからこそ鮎太は思いを寄せたのだと改めて思った。

鮎太は、あすは何かになろう、何かを掴もう」と足掻いても、結局は何も手にすることができない自分の非力さ、それに直面する苦しみから逃避したかった。だから、あすなるでしかない。」と言って、檜」を指すことから敢えて逃げていたのだ。しかし、その反面、あすなるでしかない。」という言葉は、心の内では、まだ自分は檜になれるはずだ。」という期待を抱いていることもわずかに感じられる。怠惰な日々を過ごしていても、まだ自分の中に「檜」への憧れがあつたはずだ。そんな隠れた気持ちを思い出させてくれたのが彼女の言葉だつたのだと思う。

幼い頃に思い描いていた、漠然とした夢や希望。それらは、社会の複雑さや、物事を成し遂げることの難しさを知っていくうちに、自分の中で置いてけぼりになってしまっていた……。檜になろう」という思い、それは太陽に向かっていくような「向日性」と言ってもいいかもしれないが、そんな感情よりも劣等感が先立ち、人の功績を見ては、ああ、自分には手の届かない場所だ。」と目を伏せてしまう……。鮎太だ

けではない。私も含めて多くの人間が大人になるにつれて、そうなってしまいうのかもしれない。

しかし、思うように生きることができなくてもいい。あすは何かになるう」という思いを抱きながら、自分らしく生きて、自分という「あすなるの木」を大きくすることが大切なのだ。

一人の人間の少年期から壮年期までを描いた本作は、嫉妬や羨望、競争心や絶望などの人間の感情の動きを詰めた、感受性の劇だ。そして、鮎太だけではなく、全ての人々が経験する人生の流れがそこにはある。

人は皆、自分の中で、思い思いの「あす(は○○になるう)」を抱えている。そうして生きていって気付くのは、自分という「あすなる」が隣人とは違う枝振りの木だということだ。みんなもがき続けているけれど、自分と同じ「あすなる」はどこにもないのだ。

どんなに未完成であっても、自分は自分らしい木になるために、これからも枝を伸ばし続けてゆこう、この作品との出会いを通して、そう思えた。

#### 『弁上靖著 『あすなる物語』のあらすじ』

天城山麓の小さな村で祖母と二人、土蔵で暮らしていた鮎太。多感な青年時代を経て新聞記者となり、やがて終戦を迎えるまでを、六人の女性との交流を軸に描く。明日は檜になると願いながら、永遠になりえない「あすなる」の木の説話に託し、何者かになると夢を見、もがく人間の運命を描く。